カフェサロン「国際文化比較論－文化・科学・技術と教育の関わり－」
報告

1．日時　2007 年 11 月 2 日（金）14：00－17：15
2．場所　京都大学芝蘭会館　2 階第 2 研修室
3．プログラム
（1）　基調講演
「横断文化社会心理学の現在：日本と米国の個性とコミュニケーション」
講演者：　Dr. David Dalsky（京都大学客員講師）
（2）　パネルディスカッション
「異文化コミュニケーション：日本の外国人，外国の日本人～私の体験から相互啓発の道を提案する」
パネリスト：Dr.Per Christer Lund　(ノルウェー大使館科学技術参事官),
Ms.Claire Czerny（フランス電力日本・韓国地域総代表夫人），川本義海氏（福井大学大学院准教授），
Dr.David Dalsky（京都大学客員講師）
司会：　竹内みちるさん（京都大学大学院人間環境学研究科博士課程），
杉万俊夫先生（京都大学大学院人間環境学研究科教授）
4．参加者　　約50名
5．カフェサロン配布資料
（1）演者・パネリストのプロフィール
（2）ダルスキー氏講演要旨
（3）ダルスキー氏講演資料
（4）ルンド氏プレゼンテーション資料
（5）チェルニー氏プレゼンテーション資料
（6）川本氏プレゼンテーション資料
6．概要
冒頭、久郷理事より，今回の国際カフェサロンの趣旨説明ののち．京都大学大学院人間環境学研究科博士課程 1 年の竹内みちるさんの司会，杉万教授の司会協力で，基調講演とパネルディスカッションが行われた．講演，パネルディスカッションともに，基本的に英語で発表され，講演では司会者の竹内さんが講演者の英文の発表スライドを和訳解説し，またパネルでは杉万先生がパネリストや聴衆の意見を適宜通訳された．

基調講演

講師の米国のダルスキー博士は，現在、京大人間環境学研究科の客員講師である。同氏は米国と日本で比較文化研究の調査・実験を行ってきた成果の一端を分かりやすく紹介された。日本でもグローバリゼーションが東京や大阪から地方に波及し，地方の若い世代にも米国や日本の大都会と同様に職場よりも家族や友人を大切にする意識，個性を大事にする意識などの個人主義が認められた。さらに日米の学生間コミュニケーションに関する研究成果については、親密な対人関係において自分を大切にする気持ちの変化がその時のその人の置かれた環境や文化に依存すること，自意識が相手（他者）と重なり合うこと，相互に高く評価することによって自尊意識がますます高まっていくことは共通であるが、日本学生では自尊意識は相手に誉めてもらうことで高まるのに対し、米国人学生は自尊意識が高まると自分で自分を誉めて誇示するように、やはり日米で態度は異なることが報告された.
（詳細は、配布資料の（2）、（3）参照）

パネル討論

コーヒーブレークをはさんで始まったパネルディスカッションでは，先ずノルウェイのルンド博士がノルウエイと日本での長い生活体験からの感想，続いてフランスのツェルニー夫人が日本での異国経験，そして最後に福井大学の川本博士が，英国での研修体験を発表された．とくにルンド博士、チェルニー夫人から、はっきりものを言わず、暗黙で場を読むことに重きをおく日本人のコミュニケーション傾向に対して、はっきり意思表示をすることを重要と考える欧州の考え方を対比し、その辺にお二人が違和感を持つことを強調された。（各パネリストの発表の詳細は、配布資料（4）、（5）、（6）参照。）

その後、コーデイネータの司会で、フロアとパネリスト間での自由討論となったパネルの展開を以下に纏める。

（杉万先生）

本当はこれからパネリストの皆さんに議論をしてもらうつもりでしたが，時間も少なくなっておりますし，会場の皆さんとのやり取りの時間をたっぷり取った方がよいと思うので，ここで会場からパネリストの方々に質問やご意見を出していただきます．

（膳所高校の辻美也子先生）

日本人社会では判ってくれる筈という暗黙の前提でコミュニケーションをしようとする傾向があります．結局，誤解を招かないようにする際の大事なポイントは最初のコンテクスト（文脈）を正しくキャッチすること，すなわち冒頭の段階でこちらの言いたいことを正しく「伝え」，あるいは相手の言いたいことを正しく「把握」することではないでし

ょうか？
(ルンド博士)
そのとおりです．そのため欧米でははっきりと言葉で説明することが大事とされています．
(久郷)
中越沖地震の原子力発電所の TV 報道では原子力発電所が安全に停止したにもかかわらず，その後の風評や火災対応の騒ぎを見ると，科学技術の分野では欧米流のはっきりものを言うコミュニケーションが求められているのではないでしょうか？特に非常時にはそれが必要と感じます．
(ルンド博士)
中越沖の地震の報道を見ると，当事者である事業者や行政はデータを発表することに慎重になりすぎたように思います．市民の知りたいことを概略でよいから早く発表すべきと思います．
（ツェルニー夫人）
責任ある部署ははっきりものを言うことが大事です．しかしフランスでは TV 報道はそれを正確に伝えていないと世間は認識しているようです．
（川本博士）
日本では「心配しすぎ」と「全く関心を持たない」の 2 極端に分かれていると思います．
(ルンド博士)
科学者は冷静に定量的正確な情報を伝えようとする一方で，市民はハート（感情）で情報を受け取る傾向が強い．日本の原子力施設の PR 館に行って見て驚いたのは，科学的事項を説明するためにキャラクターを使っていることが多いことです．
欧米ではそんな伝え方はしない．でもそれなりに日本社会では必要なことなのかもしれない．科学コミュニケーターは「かわいらしさ」が何故 PR 館で求められているか？をしっかり理解しておくことが必要と思います．
(ルンド博士)
ノルウェーの国民は原子力発電に対し，距離を置いてきましたが，ここ数年で少しずつ賛成側に意識がシフトしています．それは頭で理性的に評価し始めたというよりも，地球温暖化抑制のための手段として代替エネルギーを考えた時にほかに適当なものがあるか？という情緒的な判断が寄与していると思います．
(杉万先生)
川本博士のプレゼンで，「コモンセンスにたよるコミュニケーションよりもグッドセンスに基づくコミュニケーションが大事」という句がありました．このことについてもう少し解説していただけますか？
（川本博士）
コモンセンスという用語には暗黙に共有されている意識と言う意味合いが含まれています．一方グッドセンスという用語は表現が難しいのですが良識というか理性的に考えて良いと判断したという意味合いを指しています．
(ルンド博士)

私の受けた印象で具体例を述べますと，ゴミだしをする時，「早朝に出すように」というのは日本社会では「コモンセンス」となっています．一方私の「グッドセンス」では朝早くから起きられないので，収集に遅れないようにするためには前の晩に出しておくことが正しい判断となります．
（小山氏）
日本人社会のごみ収集に関する「コモンセンス」の背景について説明します．日本にはカラスが多い．前の晩からゴミを出すと朝早くからカラスがゴミを突っついて，ゴミステーションは散乱したゴミで見苦しいものになってしまいます．そこでできるだけゴミ収集車が来る直前にゴミを出そうとすることが常識になっているのです．
（ツェルニー夫人）
そうすると「蓋のついたゴミ置き場にすれば良い」ということが私には「グッドセンス」になります．付け加えますと，私の体験ではゴミ容器を洗うことは「グッドセンス」でした．ところが，ところ替わって別の国に居た時に，それは水の無駄遣いだと注意されたことがあります．注意した人にとっては水を倹約することが「グッドセンス」なのです．
（杉万先生）
「グッドセンス」と「コモンセンス」の違いは，その時，その場所の社会的な価値がどこに置かれているかに依存し，一度自分の頭の中で考えて「良いことだと判断しているかどうか」が大事のようですね．
（医療関係に携わる社会人博士課程学生）
私は看護の仕事をしていますが，看護師は患者の気持ちを察して動けるようになることが一人前のスペシャリストになることだと思っています．スペシャリストである看護師にとって医療関係の特別な用語（専門用語）は即座に理解できるのですが，患者さんはそうではありません．お医者さんが使う専門用語を患者さんに翻訳してあげる役割が看護師に求められていることなのかなあと思います．
(ルンド博士)
確かに専門用語に頼ったコミュニケーションを行ってもうまく伝わりません．でも専門家としての信頼を得るために，あるいは権威を保つためには，時には専門用語を使うことも必要かもしれません．お医者さんも，もしかしたら本当は専門用語を使わずに分かり易い言葉でしゃべることができるのかもしれませんよ．
(吉川先生)
原子力と社会との関係で、欧米と日本とで世論調査の結果を対比した OECD 報告書を読みましたが、欧米では科学者や事業者のような専門家のいうことが最も信用され、メデイアはそれほど信用されていない。しかし日本だけはメデイアの報道が一番信用され，次いで科学者，その次に事業者，そして最後は行政で一番信用されていないと書いていました．パネリストの皆さんのそれぞれの国では専門家とジャーナリストの言うことはどちらが信用されるのでしょうか？
(ルンド博士)
ノルウェーではどちらの方が信用されるかというよりも，科学者の言うことをジャーナリストは市民に分かりやすく伝えるという役目を担っていると認識されています．したがってジャーナリストは科学者の言葉を正しく理解できるように勉強しならなければ

ならないし，市民に誤った視点を与えないようにしなければならない責任があります．
（ツェルニー夫人）
フランスでは，一般にジャーナリストは人の意見を取材して報道するよりも自分の意見（自己主張）を報道する傾向があります．したがって事業者はジャーナリストの動向に気を配り，ジャーナリストの意見が間違っているとタイムリーにそれを修正して事実を発表することが大事だと考えています．
(小山氏)
日本の事情を補足するならば，わが国のジャーナリストは取材し，専門家や市民のいろいろな意見を聞くように見せかけていますが，結局，自分達の都合の良い意見だけをピックアップして報道していると思います．つまり一見，多様な人の意見を聞いた客観的報道のポーズで、実は自分の意見を発信するという高度なテクニックを使っていると思います．
(杉万先生)
原子力報道などでは新聞は偏っているのでしょうか？事業者の立場からはどう思いますか？
(久郷)
確かにわが国の 5 大紙の中では，既存の権威に対して批判的な報道をする紙面が多いと感じます．
(小山氏)
ジャーナリズムは権威に抵抗することにその社会的存在意義を見出しているから，その傾向はあると思います．
(ルンド博士)
確かに報道が偏ることもあります．だがディベートのかたちで報道されれば，国民の意見は少しずつ修正されていくのではないでしょうか？
（杉万先生）
わが国でも，確かに少しずつディベートが放送されるようにはなってきましたが，欧米ほど一般化していないかもしれません．
(ルンド博士)
ジャーナリズムの意見というよりも，国民の意見の動向として原子力について言えば，原子力忌避に対して地球温暖化の問題はカウンターバランスをとる方向に動くと思います．
（吉川先生）
原子力については世界的にも世論と国の政策は必ずしも一致しない傾向があるようです。例えばドイツでは世論調査では原子力にそれほど反対ではないという結果が出ていますが，国政では反原子力を打ち出す環境派の政党が多数を占めて，これが国の政策となっています．反対に日本の政党はどれも原子力にそれほど明確な反対を打ち出していないし，国の政策は原子力推進なのですが，ジャーナリズムの影響で，原子力批判が多く報道され，社会的には国民の意識はそれに動かされているようです．政党の役割について諸外国の事情はいかがですか？
（ツェルニー夫人）

フランスでも緑の党はありますが2%位の支持率に留まっています．フランスでは電力量の80%を原子力で生産しています．ドイツが原子力を放棄しようとしていることは承知していますが，結局フランスの原子力発電所で生産した電気をドイツは輸入しています．フランス国民は輸出産業としての原子力の必要性を十分理解し，支持していると思います．
(ルンド博士)
ノルウェーの事情について言うと，ノルウェーは原子力を導入していません．ただエネルギーについては北欧全体の視点で考えています．実際，ノルウェーでは原子力発電をしているスウェーデンやフィンランドから電力を輸入しています．スウェーデンは国民投票が行われ，原子力について撤退する方針が支持されましたが，政治的判断で原子力は今も継続しています．国民の意識にも少しずつ変化の兆しが見えています．
(杉万先生)
おもしろい議論や意見が続いていますが，時間がオーバーし，そろそろこのカフェサロンを終える時が来たようです．大変有意義な意見交換がなされたように思います．このような機会のために話題を提供していただいた基調講演者とパネリストの皆さんに拍手を持って感謝の意を表したいと思います．
また会場の皆さんには忙しい中，お集まりいただき本当にどうもありがとうございました．

以上